



写真1 マサラ



写真2 ダル・パート・タルカリ



写真3 ダル豆



写真4 野菜



写真5 タウ



写真6 魚などの乾物



写真1 モモの袋かけ風景



写真2 畳の間での授業風景



## 棚田は甦れるか

— 若者の将来に托して —

IWAD 環境福祉専門学校  
中 村 勝三郎

### ■ はじめに

おおよそ看護の世界に縁が無い自分ではあるが、「生命（みどりのいのち）」を育て看取る仕事に長年携っており、多少なりとも相通ずる事ではないかと思え、栄えある「看護学統合研究」への掲載の機会に触れさせていただきます。

### ■ 生かしたい宝物

昨年春、広島市安芸区瀬野のある方に、4,000平方メートル程の土地と母屋を開放して頂いた。この地は五石（ごいし）と言われ、5石もの米がかつては収穫された南向きの肥沃な土地である。

「桃栗三年柿八年」と云う諺があるが、これは過去の話であり、ここで昨年の春植え付けた白桃は、麦秋のこの時期に初めての実を付けた。今年4月に開設したばかりの本校アグリライフコースの学生達と、農業実習でその果実に袋掛けを行った。生まれて初めての体験で学生達は最初恐る恐る作業をしていたが、やがて夏が過ぎて熟するのを楽しみに作業の手もどんどん進んでいった（p.62下段 写真1）。

授業は母屋の8畳と6畳本間の二間続きに、縁側を開放して広くワンルームとし、長机を並列2基4列並べ、少し狭いが1列6人ずつが座り、講師用を含めると5列にもなる（p.62下段 写真2）。

最初の授業の日、広い玄関に入った学生の一人が、「わー田舎の爺ちゃんの家と同じだ」と畳に横たわり高い天井を見上げて、「まるでお寺さんの天井みたい」とすっかり気に入った様子である。

6月下旬から半年間受講の訓練生達も、縁側から目の前に広がる新緑の山並や、遠くの団地の家並みを眺望しながら楽しそうに昼の休憩を取っている。山陽本線瀬野駅から歩いて15分の地に、一人の篤志家のご好意によりこんな素晴らしい「農業塾」を開設する事が出来た。

此処5枚の棚田は明治初期に開墾された土地で、野面石（のずらいし）により芸術的に積み上げられており、屹度年期の入った当時の石工が時間をかけて作りあげた芸術品である。全国の田畑が離農により、ここ数年間で数千ヘクタールもの面積をススキやマダケに覆われて自然に帰ろうとしている。多くの先人達の汗と涙の結晶が今や風前の灯と化していることは非常に残念である。

南向きに面していて、一日中太陽の恩恵を被っている歴史あるこの土地に植えた桃や林檎等、10種50本の果樹がタワワに実を付けるようになり、ここで学んだ学生及び訓練生達が、一人でも多く農業の先兵として巣立ち就農してくれる事が、この美田を開拓したご先祖様への恩返しではなかろうか。

果樹生産には太陽の恵みが1日中あり、水捌けの良い粘土混じりの砂質土が最適である。自然を人の手で変えることは容易では無いが、果樹栽培に適した土壌改良は人為的にいくらかでも改善ができる。

幸いにもサッカー場の処分されるべき刈草が豊富に入手出来ることもあり、刈草を主体にしての堆肥は、シマミミズが繁殖しスポンジ状の果樹土壌に変身する事が可能である。ところが一方では、このシ

マミミズを最高の御馳走としている猪の出没である。多くの農業生産地で困っている防猪対策、我等の果樹園でもこれからは猪との知恵比べに悩まされる事だろう。

同じ敷地に続く孟宗竹林の竹を活用させて頂く事により、猪の防備や野鳥対策、また台風対策が成せる。孟宗竹は筍から5年もたてば古木となり、筍の発生が劣ってしまうこともあり、適当に間引く事も重要である。その意味では今現在多くの栽培農家を使用している、建築用足場パイプやコンクリート支柱より昔から使われてきた孟宗竹の支柱は、筍の生産促進やエコ対策からも一鳥二石とも言えよう。

数十年前まで手広く農業をされていたと思われる倉庫には、ハゼに活用されていた杭（刈り取った稲穂を天日干しにするための木材）をはじめ沢山の農業資材が今では眠ったままとなっている。私達はそれを果樹の転倒防止の支柱他、色々図々しく活用させてもらっている。

## ■ 納得できる食材づくり

日本の食糧自給率が40パーセントを割ったと報道されて久しいが、果物においても、自給率は昭和35年代の100%を境に平成10年には40%以下へと激減している。全国の80%のイチジク苗生産を誇っていた、廿日市市の種苗店（平成20年閉店）が開発した「ロードス」は剪定枝を春挿木し、その年の秋には美味で大きな実を多数付ける高品質な品種だ。

今までの農業は、その地域で一番条件の良いところを水田として開墾され、水田に適さない農地で果樹の栽培が行われたが、今日では日当たりが良く交通の便も良い一等地が、後継者不足問題等で休耕地としていくらかでも存在している。最近の果樹は他の農作物と同様、品種改良が日々進んでおり、諺に言われる程何年も待たなくても、昨年植えた木に今年もう実を付けてくれる果樹も有り、経営の手法と努力によっては若者の職場として少なからず成り立つのではなかろうか。

地球温暖化が叫ばれ、果樹の産地も少しずつ移動している現在、消費者のニーズに合った新しい品種が次々に開発されると同時に生産技術も変化しており、若者が農業へ新規参入しても成功の可能性は大きく成ってきていると思われる。それに呼応するように書店には農業専門コーナーが出来る程である。

私がまだ学生時代、家業を継いだ4歳上の兄が、当時全国的に広がった温州みかん生産のブームに乗り、お茶畑約1町歩をすべて温州みかんに転作したが、筑後平野の山間で取れるみかんには糖分不足に加え酸味が取れない。そこに来て全国的な生産過剰と外国産の良質な果樹の輸入が増し、品質の悪い物は自然淘汰され、仕方なくその後再び八女茶の生産をしているが、70歳の今では地域の若者に負けず、緑茶の生産にゴルフにと町に住んでいる私より、より活発で楽しい日々を送っている様だ。

これからの農業は、作って終わりの時代から自分で値段を付けて販売できるブランド品を目指した農業経営をしなければならない。「瀬野農園」でもブランド品の果樹作りを目指し、この地に適した栽培手法を早く見出さなくてはならない。その一環としてシマミミズの活用や広島県因島のM社の活性剤や、和歌山県津市のK社の活性剤を使用するなど高品質の果樹作りの手法を試みている。

この地に惚れ込み、ブドウ・ナシ・イチジクに加えリンゴ・サクランボ・温州みかんと欲張って試植したが（写真2）、いかに外観が良く果樹に欠かせない糖度を増すか、それに安全安心を加えるかが勝負である。

## ■ 小さなセンサー プレイボーイ

果樹農園入口にスタンダード仕立のバラ（品種プレイボーイ）を植えているが、このバラは非常に強健で開花時期も長く単弁で色も鮮やかである。殺風気な園の入口を少し着飾りたいからでもあるが、一つにはバラは病害虫に弱く繊細な植物で、少しの油断も出来なくそのため栽培には苦勞と手間を要す。種々の果樹栽培に適した日本の気候ではあるが、梅雨と熱い夏の気温には病害虫の発生にはこれまた最高の条件である。繊細なバラを近くに植える事でいち早く病気や害虫の発生をバラが教えてくれる。病害虫の発生予擦の役目をバラがしてくれるのである。

未だ若く細い果樹の間には、その空地を利用して年中少しばかりではあるが野菜を栽培している。春

のアスパラ・スナップえんどうに始まり玉ねぎや馬鈴薯, 夏場はスイカ・トマト・キュウリにカボチャ・トウモロコシ, 秋はさつまいもとバラエターに富んでいる。収穫したら台所を借りて, 圧力釜で簡単に美味しい御馳走を学生達と食するのが楽しい。果樹の勉強ばかりでなく, 多くの自然の恵みに触れることで農業が好きになり天職に成る事も期待している。

## ■ おわりに

昨年の秋には隣接の荒れ放題であった休耕田がきれいに雑草も刈られ, この春から数本もの果樹園へと変身した。また日を増すごとに学生や訓練生の目が輝きを増している。将来農業塾の卒業生が, 崩壊した美田を蘇らせて, 環境の保全と安全安心な食糧生産の担い手に育つ事を大いに期待したい。